

WA  
WA  
NEWSPAPER  
わわ新聞

3.11 生きることが



vol.16  
2016.9

## 復興リーダーのインタビュー

3.11 以降の復興へ向かう創造力をつなぐ新聞。  
岩手、宮城、福島にて発刊。

# つくることが生きること

## 復興リーダーのインタビュー

2011 —— 2016

### リアルな未来を 「見通す」ということ

8月、高さ12・5メートルの巨大防潮堤が沿岸を閉み、12メートルのかさ上げ地が広がる陸前高田に車で入った時だつた。そこには今まで日本のどこでも経験したことのない異様な人口的風景が広がっていた。どこかに自分が知っている場所がないかと探しても、記憶の辿りようがないくらいに変わり果てていた。そして、千百億円の事業費をかけたかさ上げ地に生活の足跡が生まれ、子供達の笑い声が聞こえて来る日をイメージすることは不可能だった。どこまでも平に整地されたこの場所で、これから生活していく人々の「見通し」を感じることはできなかつた。

「見通し」とは、補助金などに頼らず自分の力で生きていくという自信や勇気が見えてくる事であり、一人ではなく家族や仲間と一緒に生活していく未来感のことである。基本的インフラなどの日常感がない現在は、そんな現実感をもつた個人の「見通し」は、まだまだ描きにくい。

被災地を回った直後、とある東京の郊外の街で、かさ上げ地の不安な未来のイメージが重なってしまった。その街は何もない土地に駅をつくり、ベットタウンとして急速に開発され、大型ショッピングセンターには高級ブランドが並び、どこを歩いても清潔で安心な街並みだつた。生活の豊かさを表現するかのようなアートプロジェクトも始まっていた。全てが消費欲望のためにつくられたように感じた。そんな街の姿に、陸前高田の未来のイメージ

が重なった。津波でなくなつた街の記憶が徐々に消え、この典型的な再開発と同じになつてしまふのではないか？ 消費欲を喚起する超資本主義が人間の欲望を

同じ「見通し」に仕立ててしまつているのではないか？

しかし、復興リーダーたちの生の声から未来をイメージすると、その不安は少し治まつた。彼らの「見通し」には、自分の力で生きていく自信・勇気、そして家族や仲間と一緒に生活していく未来感がしつかりとあつたからだ。

震災直後、復興リーダーのひとりである塙釜の高田さんに言われたことがあった。「私達を心配してくれてありがとう。でも私はあなた達をとっても心配します。それは、今起きた地震より大きなものが東京に来たときのイメージがハッキリとできるから。」

未来からの予言のようで妙にドキッとしたことを今でも鮮明に覚えている。高田さんはリアルに見えていた東京の大地震が、私にはまだ曖昧にしか感じられない。その意味でも東京に起きる巨大地震を目前にして、やらなくてはならない事は、政治的「見通し」に惑わされない「私個人としてのリアルな「見通し」をイメージすることだ。

今こそ、勇気ある行動と信念をもつた社会への意識改革が加速していくと思っていた。誰しもが自然の大きな力に寄りそう社会をつくる生き方を選ぶと思っていました。特に原発に依存する日本の社会構造を変える勇気を国民誰しもが抱くと思つていた。しかし、現実は、憲法を改正してまで戦争へいざなう政治的民主主義が正義を振りかざし、福島で立ち入

り禁止区に指定された地域の少数の被災者の声は届かなく、原発の再稼働を推進する震災以前の社会意識に戻つてしまつている。

なぜ、私たちは、震災や戦争を何度も繰り返しても同じ過ちをするのか？ その果てしない欲望がどこから生まれてくるのだろう？ 世界の社会状況が戦前に逆行するように極端なテロリズムや右翼化する政治家の超資本主義的思想に不安感を抱くのは、私だけではないだろう。



2012年、岩手県大槌町吉里吉里の芳賀正彦さんにインタビューを行う中村とわわプロジェクトスタッフ。2011年から数名の復興リーダーへ定期取材を行い、映像や紙媒体で発信してきた。過去のインタビューはウェブサイトで見ることができる。

が重なった。津波でなくなつた街の記憶が徐々に消え、この典型的な再開発と同じになつてしまふのではないか？ 消費欲を喚起する超資本主義が人間の欲望を同じ「見通し」に仕立ててしまつているのではないか？

しかし、復興リーダーたちの生の声から未来をイメージすると、その不安は少し治まつた。彼らの「見通し」には、自分の力で生きていく自信・勇気、そして家族や仲間と一緒に生活していく未来感がしつかりとあつたからだ。

震災直後、わわプロジェクトを始めた時に書いたテキスト冒頭である。私は3・11以後、人類が培ってきた文明に大きな軌道修正が生まれ、これから循環型社会への意識改革が加速していくと思った。誰しもが自然の大きな力に寄りそう社会をつくる生き方を選ぶと思っていました。特に原発に依存する日本の社会構造を変える勇気を国民誰しもが抱くと思つていた。しかし、現実は、憲法を改正してまで戦争へいざなう政治的民主主義が正義を振りかざし、福島で立ち入

り禁止区に指定された地域の少数の被災者の声は届かなく、原発の再稼働を推進する震災以前の社会意識に戻つてしまつている。

なぜ、私たちは、震災や戦争を何度も繰り返しても同じ過ちをするのか？ その果てしない欲望がどこから生まれてくるのだろう？ 世界の社会状況が戦前に逆行するように極端なテロリズムや右翼化する政治家の超資本主義的思想に不安感を抱くのは、私だけではないだろう。

今こそ、勇気ある行動と信念をもつた社会への意識改革が加速していくと思っていた。誰しもが自然の大きな力に寄りそう社会をつくる生き方を選ぶと思っていました。特に原発に依存する日本の社会構造を変える勇気を国民誰しもが抱くと思つていた。しかし、現実は、憲法を改正してまで戦争へいざなう政治的民主主義が正義を振りかざし、福島で立ち入

震災5年、変貌する被災地。上から2011年4月、2014年3月、2016年2月21日の岩手県陸前高田市。  
津波で壊滅的な被害を受けた旧市街地で、被災地最大規模のかさ上げ工事が進められている。



Photo : Kyodo News



特定非営利活動法人 吉里吉里国 理事長  
【岩手県大槌町吉里吉里】

## 芳賀正彦さん

# 正直に日々の暮らしを続け、 現場に仁王立ちしていれば 怖いものはない

芳賀 正彦 はが・まさひこ

1948年福岡県糸島市生まれ。「吉里吉里国 復活の薪」プロジェクトの発起人。震災から1ヶ月が経過する頃、避難所に届けられた薪ボイラーのお風呂を瓦礫から集めた廃材で沸かしていたことがきっかけで、瓦礫から集めたスギやアカマツを薪にして販売し始める。現在は吉里吉里の森林整備を行う「復活の森」プロジェクトや人材育成事業に取り組む。

### 避難所の焚き火から 広がる吉里吉里国の活動

震災直後は、薪の生産と里山の整備を行っていました。今もこのふたつの事業はずっと続けていきたいと思っています。さらに力を入れているのは、まちの未来を担う子どもたちの人材育成と林業の担い手、後継者づくり、再生可能エネルギーの地域内普及です。活動が広がってきたのは、震災から2年が経過する頃ですね。その頃から私たちの気持ちにも余裕が出てきて、少しずつ円滑に推進できるようになりました。なぜ人材育成が必要かといふと、「私たちが生きている間だけ森林整備や薪の普及をやればいいのか?」と思うようになり、これは永続してはじめて私たちの理念が正しかったかどうかの答えが10年、30年、50年先にあらわれるんだなと気がついたから

高さ約20mの津波に襲われた岩手県大槌町吉里吉里。2011年5月15日、芳賀さんは避難所での焚き火をきっかけに、瓦礫から薪をつくり販売する「吉里吉里国復活の薪」プロジェクトを開始。瓦礫の撤去が進むと、芳賀さんは手つかずの人工林に入り、間伐整理へと活動をシフトさせた。そして収入を失った漁師たちにもチエーンソーの使い方から倒木の仕方などを教えるプロジェクト「吉里吉里国林業大学校」を実施。「犠牲者に恥ずかしくない生き方をしていきたい」そう語る芳賀さんは、今日も吉里吉里の山に入り、チエーンソーを握る。

人材育成事業の一例を挙げると、「吉里吉里学園小学部」というのがあります。これは年4回、小学校5年生の野外体験学習を受け入れています。チエーンソーは扱えない手ノコを握らせて1本の木を伐倒する間伐体験をやっています。私たちが常に心がけているのは、子どもたちが自分の手で木を倒し、薪割りをすること。自分で得た成果が、その子たちの本当の自信につながると思っています。そしてもうひとつ、地域の山林所有者や、森に興味がある地域の人たちを対象に林業技術習得のための林業学校も行っています。吉里吉里集落の8割の民有林を所有しているのは漁業者です。だから漁師たちに林業技術を習得してもらうことによって、海が荒れたとき、山に入って小遣いを稼いでもらう。林業学校の門戸は年齢・性別問わず大きく開いています。

間伐材から薪をつくる事業も続けていま



すが、最初は8割が県外からの注文でした。それが今は9割以上、地域の人たちが薪を使ってくれています。ちょうど2年前から、まちの復興工事に携わる建設工事の従業員の方たちの宿泊施設がつくられました。その共同浴場では私たちの薪が使われています。毎日100kgの薪を365日、火をくべています。

すべての答えは  
現場が教えてくれる

こうして活動を続けて来られたのも、震災直後に吉里吉里国をつくる理念をずっと持ち続けているからだと思います。それは、貧しくはない質素な暮らし、少しの不便さを楽しむながら心豊かな日々をおくること。つくることは生きること。自らが炎天下や真冬の森の現場に仁王立ちすること。このことは震災直後、今、これからも変わりません。毎日「今日も事故がないように守ってください」という気持ちで森に入る。山から帰るときは「今日ちょうど山の恵みをいただきました。明日もまた来ます」と下る。真夏の炎天下の作業では、ズメバチに追つかれたり、マムシに睨まれたり、漆かぶれにもなります。でも11月になると高い山には初雪が降り、涼しい秋風が吹いてくる。そういうときに秋風に身を任せて初雪のなかで立ち尽くすことがあります。そのときは「俺はよく夏の炎天下を乗り切ったな」と自分を褒めてやりたくなります。そのような感動を覚えます。そして、少しずつカモシカのような強靭な足腰になって一人前になる。まさに森が生き方を教えてくれてい



2012年1月、森で伐倒を行う芳賀さん。間伐を行うことで太陽の光が入り、山が豊かになる。それは海が復活することにも繋がる。

るんです。それは正直に、現場で仁王立ちし続ける人の特権。険しい山の斜面でどうにも足が動かなくなることもあります。そんなときは立ち止まって空を見上げます。そうすると震災の犠牲になつた人たちの顔が浮かんできます。そこで、ちょっと足が動くようになります。

震災直後は生き延びるための非常事態でしたが、5年が経過した今もまだ先の暮らしが見えない非常事態は続いている。でも、私は慌てたりしなくていいと思っています。もう間もなく、そういう非常事態は解決できる。今度はこれまでにないような、もっと立派なコミュニティーをつくる機会が与えられるんだとプラスに考えています。ここで正直に暮らす人たちが主体となつた地域づくり、まちづくり、日々の暮らしを続けていけば、なにも怖いものはありません。

るんです。それは正直に、現場で仁王立ちし続ける人の特権。険しい山の斜面でどうにも足が動かなくなることもあります。そんなときは立ち止まって空を見上げます。そうすると震災の犠牲になつた人たちの顔が浮かんできます。そこで、ちょっと足が動くようになります。

震災直後は生き延びるための非常事態でしたが、5年が経過した今もまだ先の暮らしが見えない非常事態は続いている。でも、私は慌てたりしなくていいと思っています。もう間もなく、そういう非常事態は解決できる。今度はこれまでにないような、もっと立派なコミュニティーをつくる機会が与えられるんだとプラスに考えています。ここで正直に暮らす人たちが主体となつた地域づくり、まちづくり、日々の暮らしを続けていけば、なにも怖いものはありません。



# この町に住む人にとっても、 故郷を離れた人にとっても、 “いつでも帰って来られる場所”を 守っていく

山田八幡宮・大杉神社 宮司  
【岩手県下閉伊郡山田町】 佐藤明徳さん

「10年かかっても、山田祭をもとの姿に戻す」。震災直後から何度もそう語っていた佐藤宮司。山田祭は山田八幡宮と大杉神社、ふたつの神社からなる祭。初日は山田八幡宮の超重量級の神輿が1日中練り歩き、翌日は大杉神社の神輿が海上渡御を行い、連日朝から晩まで町は祭一色となる。津波と火災で町の8割が壊滅的被害を受け、沿岸部にあつた大杉神社に残ったのは鳥居ひとつだけだった。5年が経過し、ようやく災害公営住宅が建ち始めたが、それより2年も前に大杉神社は山田町を見渡す山の上に再建され、山田祭は復活を遂げた。

山田八幡宮の神輿を修理に出しているときに被災し、修理を中断しましたが、その後修理費用900万円の寄付を募ったんです。すると神社関係者や氏子をはじめ、約10ヶ月で1300万円もの寄付をいただくことができ、どうにか震災の翌年に山田八幡宮の祭を復活することができます。しかし、大杉神社の祭は神社 자체が被災したので神輿を修復する前に社を再建しなければならない問題を抱えていました。

2013年、伊勢神宮の式年遷宮が行われた際に、神宮林から伐採した支援材をいただけることになりました。神宮林のヒノキを他の神社に提供するというのは、初めてのことだったのですが、それを受けて大杉神社の拝殿を再建。私が言うのもおかしな話ですが、世の中には目に見えない不思議な力があるのかなと思います。ちょうど拝殿を再建した頃に申請が通り、日本財団の支援でようやく大杉神社の神輿を修理に出せることになりました。それが2013年の祭が終わった翌日のことです。2014年9月、復元した神輿が戻ってきました。祭の前にお披

露日の渡御をしたのですが、そのとき涙を流している方もいらっしゃいました。嬉しくて涙が出たのか、懐かしかったのかはわからないですけれど。こういった経緯があり、約3年で山田八幡宮と大杉神社両方の祭が復活しました。ここまで来れたのは関係者や氏子、郷土芸能関係者が強く求めていたというのが大きい。そういう力と運によって山田祭は復活できたのだと思います。神社は心の拠り所と言われていますが、災害が起きたとき、本当に祭や神社が住んでいる人たちの心の支えになるんだだと再認識しています。故郷を離れた人にとってもそれは同じ。生まれ育った故郷を懐かしく思いますし、行き詰まつたときに両親の顔や祭を思い出します。そういう人たちがいつでも帰つてこられる状況をつくりたいというのが、震災当時からの想いでした。そのひとつとして、祭をずっと続けていくこと。精神的に苦しいときもあるでしょう。祭を思い出して「今年も見に行こう」と、それを糧に頑張つていただけるように、今まで通り続けていきたいなと思っています。

祭は震災前より縮小していますが、10年、20年経てばこれよりも縮小する可能性もあります。子どもの数や人口の減少、祭に関わる人の高齢化。これは全国どこの神社も抱えている問題です。学校に働きかけて、子どもたちに郷土芸能を教えていくことも解決策のひとつ。小学校の授業や先生の研修会で神社や祭の話を活動もしています。数十年後には消滅する町„だなんて言われていますが、そうならないように踏ん張りたい。その地盤をつくるのが、我々の年代の役目です。若い世代が地元意識を強く持てるように、祭を通して伝えていきたいと思っています。

佐藤明徳 さとう・あきなり

1961年岩手県山田町生まれ。山田八幡宮と大杉神社の宮司をつとめる。大杉神社は津波により流失。多くの氏子が被災するなかで祭の復活が望まれていた。町の活気を取り戻すため、故郷を離れて暮らす人のため、大杉神社と山田祭の復活に尽力。2011年には例年とはかたちを変え、境内のみで行う「復興祈願例大祭」を行った。祭の季節になると、毎年山田町に聴こえていたお囃子の音は震災後一度も途切れていない。



2014年に大杉神社の神輿が復元され、震災後はじめて海上渡御が行われた。神輿を担いだまま海に入り、船に乗せる海上渡御は山田祭の見どころのひとつ。



福島県浪江町請戸地区に蔵を構えていた鈴木酒造店は、津波で蔵が流され、福島第一原子力発電所の影響で避難を余儀なくされた。故郷に戻ることが許されず、アイデンティティが揺らぐなかで「浪江町のものを残してくれ」という地元の人からの声を受け、鈴木さんは再び酒造りを行うことを決意。南会津郡の蔵元「国権酒造」の一部を借りて再開した後、山形県長井市にて「鈴木酒造店・長井蔵」を開業。2016年春より、新たな事業として酒粕から肥料をつくり、長井市と福島市で実験的に栽培を開始。将来的には浪江の農業復興にも役立てたいと鈴木さんは語る。

## 酒造りの向こうに見える故郷の姿

5年前にここ山形で蔵を構え、長井蔵ではもともと自分たちがつくってきたブランド「磐城壽」、前蔵である東洋酒造で製造されていた銘柄を引き継いだ「一生幸福」のほかに3つのブランドをつくりました。そのうちのひとつ、震災から2年目につくった「親父の小言」は、浪江町が出資のものなんです。「朝起きるよくしろ」「亭主はたてる」など、50弱の文句があるんですが、これをすべて守ると家庭円満にいくと言われている。自分たちは原発事故の影響を受けていますから、社会のいちばん最小単位である家庭の絆を大事にした商品をつくりたいなと思い、「親父の小言」の商標を持っていた浪江町の商社と一緒につくりました。

これまで本当に自分たちの酒造りを

きつちりやるんだという感覚でしたが、今は場所も環境も変わりましたし、本当に支援してくれた方も大勢いらっしゃいます。その人たちの想いを、今度は繋ぐ役目にならなければと思います。また、浪江町でいち早く除染が進んだ酒田地区では米の実証栽培が行われ、収穫された米は放射性物質検査の結果、県酒造組合が定めた放射性物質濃度の自主基準(1kgあたり10ベクレル)を下回りました。その米を使った「希(ねがい)」と「望(のぞみ)」を昨年つくりました。

2017年の3月、浪江町は帰町宣言をする予定です。ただ、町は3つの区画にわかれています。うちひとつは長期帰宅困難地域になっているので、何十年かかるかわからないんですけど、しばらくの間は戻れません。地域ごとに復旧に向けた動きはばらつきがありますが、帰町宣言をターニングボイントとしていろいろな人たちが交流できる土地になっていくんじゃないかなと思います。浪江町にも、たくさん的人が集まるさまざまな祭がありました。春は花見をしながらの花火大会、夏は相馬野馬追、秋は十日市の花火大会。場所が変わつてもずっと続けていたんですね。帰町宣言されても、町に帰る人は3割を切るとも言われています。そうなると、浪江町が消滅する可能性もある。きちんと次の世代に繋いでいくためにも、自分たちの世代ができるのをしっかり話し合ってやろうと、今年から事業主で集まって浪江町内でどういう方向で事業を再開するかの勉強会をはじめています。

株式会社 鈴木酒造店／株式会社 鈴木酒造店長井蔵 杜氏  
【福島県浪江町／山形県長井市】

## 鈴木大介さん

# 人がいなくなってしまっても、 未来志向で動かなければ そこで生きた証も残らない。

鈴木 大介 すずき・だいすけ

1973年福島県浪江町生まれ。江戸時代末期から続く鈴木酒造店を代表するブランド「磐城壽(いわきことぶき)」は祝いの酒として地元の人々に愛されてきた。震災と原発事故以降、試験場に預けていた酒母が残っていたことと、山形県長井市で廃業を考えていた「東洋酒造」との出会いがあり、2011年11月より営業再開。「磐城壽」「一生幸福」「親父の小言」「土耕ん釀」「鄙の影法師」、復興支援酒「甦る」という6つのブランドを手がける。



### 新たな土地での経験を 未来へつなぐ

この間、契約栽培をお願いしに農家さんのお宅に伺ったんです。そこで在来野菜のベニバナで漬けた漬物をいただいたんですね。お皿に盛られた野菜を見て、その土地で育まれた文化というか、時間の積み重ねがすべてありました。浪江町は今、それをすべて失っている状態なんです。本当にこのままではすごく悔しいと、そのとき思いました。浪江は田舎町なので三世代同居が多くつたんです。おじいちゃん、おばあちゃんが取ってきた野菜を、お母さんが漬けるっていうのが当たり前の光景で。それが原発事故でバラバラになってしまった。農業や漁業再建といったときに、浪江独自の料理の仕方たり、祝儀不祝儀のときのしきたりだったり、そういうのを残しておかないと地域の魅力を上手に発信できなくなる。わたしの商売上、飲食店との繋がりもありますし、そういうた浪江の食文化みたいなものをきちんとデータ化して浪江の暮らしの息吹を残しておかないと感じています。

たまたま、私たちは山形県長井市に来たんですけど、この土地は環境に対してすごく意識の高い町です。豊かな水源になっていふ森に対して、一切開発の手を入れないという条例もあり、国内で最初に市内の生ゴミを集めて安心安全な農産品をつくる地域循環型の試みをはじめたところなんです。それを見た当たりにして、自分たちの商売でも何かできないかと意識しています。そのひとつとして、今年の春から酒粕から肥料をつく

り、長井市と福島市で実験的に栽培をはじめています。酒粕は買い手がないと産業廃棄物になってしまうんです。ムダになるものはつくりたくない。将来的には浪江町の農地で使ってもらって、浪江の農業復興であったり、長井で育てられる在来野菜を使ってもらながら地域のブランドをつくっていけばと思います。



2012年1月、鈴木酒造店 長井蔵にて早朝から仕込みを行う鈴木さん。  
ここから新たに3ブランドの酒が誕生している。

# 僕らの経験したこと 生き残るために“仕込み”として 必ず起こる災害に備える

イタリアンレストラン「ポルコロッソ」オーナーシェフ  
【岩手県大船渡市】

山崎 純さん

大船渡市内でイタリアンレストラン「ポルコロッソ」を営む山崎純さんは、震災直後からオンラインが停止するなか、厨房で必死におにぎりを握り、避難所に届け始める。徐々に仲間たちが集まり、やがて約2000食もの食事を毎日つくっていた。そして、2011年8月末に県内の避難所がすべて閉鎖されるまで約5カ月間、17万食を届け続けた2011年10月5日、活動がひと区切りしたところでようやく再開した「ポルコロッソ」では、三陸の魅力が詰まつた料理がテーブルに並ぶ。山崎さんは自身の経験と料理人という職業ならではの視点で、今後の減災のあり方を考える。

震災直後、ひとりでこの店の厨房でおにぎりをつくるところから始まって、徐々に仲間が集まり、応援をしてくださる方のおかげで10万食以上の食事を届けることができました。当時は刻々と状況が変わっていたので、必ず朝晩避難所をまわり、食事を届けて「ほしいものはないですか？ 困ったことはないですか？」と情報を集めていました。そして調理場を見せてもらつて、調理場の規模、焼き出しの数、焼き出しをしている方の人数を確認して「手がまわらないだろう」と思ったところは手厚くサポートしていました。平等支援というのはダメなんです。大変なところを助けてあげないと。避難所の情報収集だけでも、ひとりふたりでまわつているとすごく時間がかかるんです。どれだけ支援をしたい人がいても、情報のキャッチボールができないと、まわりからサポートできぬ。今は僕らが経験した、苦労したことや大変だったことをきちんと伝えて、災害が起き

る前に仕込んでおくことが大切だと思っていました。震災は他人ごとではありません。今日、明日、もしかしたら何かあるかもしれない。生き残るためにどうしたらいいのか？ 生き残ったらどうしたらいいのか？ 最初から考えておく必要があるんです。残念ながら必ず天災は起ります。でも、それを最小限にとどめることはできるはずです。

食事に関しては、プロがいないとどうにもならないこともあると思うので、飲食店組合や調理師会といった組織が大きな釜を用意しておるととか、米を備蓄したり、使える調理場を確認しておく。いざとなつたときに、すぐに対応と連携して動けるように普段からパイプをつくつておく。そして公民館にはプロパンと釜や水を用意しておく。こうやって最初から仕込んでおく必要があると思いながら時間が経過し、今に至ります。そして2016年4月14日熊本地震があり、もつともちゃんと自分たちの経験を残して防災関係の方、役所の方、みなさんに届けられていたら、地震はどうにもできないですけど、そのあとの処理はもう少しスマートにできたのかもしれない悔やんでいます。

活動を終えてからは、お店を再開して、嫁さんをもらつて、子どもを3人授かりました。僕ができる原点は、料理を通して三陸の魅力や生産者の方の情熱を伝えることだとあらためて再確認しています。お客様に「おいしい」と言つていただくことは嬉しいのですが、それは料理がおいしいのではなく、「素材にいいます。僕は「素材をいかす」のではなく、「素材にいかされている」のがコックだと思っていますのでこれからも精一杯、地元の魅力をお皿にのせて伝えていきます。

山崎 純 やまとざき・じゅん

1966年岩手県大船渡市生まれ。「ポルコロッソ」オーナーシェフ。震災当時、幸いにもお店は浸水を免れたが電気・水道も止まり、料理などできない状況でロウソクの灯りを頼りに、おにぎりをつくりはじめる。ひとりでは60個のおにぎりを握るのが限界だったが、仲間たちが集まり、活動の輪が広がっていった。その活動は1日約2000食の食事を避難所に届けながら“ご用聞き”的役割も担っていた。



2011年7月、活動拠点のリーアスホール（大船渡市民文化会館）にて。避難所では食事を届けるときの会話を楽しみにしていた人も。



いわて連携復興センター 代表理事  
【岩手県釜石市】

鹿野順一さん

# 「復興の正念場」はこれから 見通しを持つことで頑張れる。 市民ロードマップを基に、 さらに前へ

鹿野順一 かの・じゅんいち

1965年岩手県釜石市生まれ。震災直後、岩手県内のNPO法人メンバーたちと“地域住民による地域再生”を目指し、中間支援組織となる特定非営利活動法人「いわて連携復興センター」を立ち上げる。各方面からの支援団体と地元の団体をつなぎ、地域に芽生えた活動を後押ししてきた。震災から5年が経ち、国が定めた集中復興期間が終わることを見据え、岩手・宮城・福島で連携して今年6月、「市民がつくるロードマップ」を作成した。

## 「あり得ないつながり」で プラスのインパクトも

岩手県内では震災後、「地元で頑張ろう」という思いを持つNPOや社団法人など100を超える組織体ができました。その背中を押したり、横からサポートしてきましたが、助成金や行政の委託事業、寄付など資金が底を突き、活動を終えたケースもあります。中には、自分たちで収入を得ることの必要性に気付き、クラウドファンディングで資金をつくり出す人や、組織を運営することから経営することへとシフトできた団体は継続的な活動が期待できます。嬉しいのは、起業する若い人達が見えてきたこと。本業を持ちながら人の交わりや社会実験を手がける様子を見ていると、

街にしていこうと走り続けている。「正念場」ととらえ、震災前よりもいい街にしていこうと走り続けている。

釜石市の町に賑わいを取り戻そうと、2003年からまち活性化の活動を行っていたNPO法人で、中心となつて活動してきた鹿野順一さん。東日本大震災の直後から、NPOには支援先を探す県外の団体や企業からの問い合わせがひっきりなしに舞い込んだ。支援を必要とする現場につなぐうちに岩手県内全域のNPO法人とつながりができ、中間支援組織となる特定非営利活動法人を立ち上げた。釜石市の止まらない人口流出に危機感を抱きながら、起業する若者や活動を続ける団体の存在に期待を寄せている。震災から6年目以降を「復興の正念場」ととらえ、震災前よりもいい街にしていこうと走り続けている。

既存の雇用とは違う、新たな産業に結びつく芽が出てきていると感じています。僕らは残念ながら被災地になつた代わりに、リクルートやヤフージャパン、IBMといった大手企業と、通常はあり得ないつながりをもらいました。「若い人に何かを生み出す経験をしてもらおう」とマイクロソフト社と始めたロボットを動かすプログラミングのワークショップは現在も行っています。釜石では、地域外へ転居する人が増えています。だからこそ、若い人は生まれ変わっていくこの街で、地方でも新しいことができるとうプラスのインパクトを受け取ってほしい。

今年度で国が定めた集中復興期間が終ります。つまり、今後は被災行政が自分たちで復興を進めます。だから、岩手・宮城・福島の被災三県で復興に関わるメンバー、阪神淡路大震災など国内地震災害からの復興等に関わってきた外部有識者らと検討を重ね、6年目以降の復興について市民目線で発信する「市民がつくる復興ロードマップ」を今年6月、完成させました。来年以降の5年間を「復興創成期」ととらえ、目指したのは、「すべての被災者が恒久住宅に暮らし、社会生活をきちんと営むことができる」こと。被災の種類や度合い、地域が違つても、「被災者」と呼ばれる人が元の生活に戻るプロセスは同じだから、岩手、宮城、福島における「最大公約数」をまとめました。

「いつか来る」と言っていたことを、僕らは経験してしまいました。東京の人は、今日、首都直下地震が起きると想像しているでしょうか？ 予想していない事が起きた



時、人は一人では生きていけません。復旧復興する時には、30年、40年前の日本各地にあつた地域コミュニティが必要とされます。日常べつたりなつながりではなく、必要な時に扉をノックして声掛けできる関係性や、どこに小さな子ども、お年寄りがいるかを知っておくこと。必ず、次の災害は来る。だから、今のうちに思い出しておくといいと思います。

## 「明日も生きる」 その思い

7月中に2度、大地震から4ヶ月が経った熊本に伺いました。熊本でもやはり、自分たちがこの5年、意図しないままにさまざまなつながりを得て来たのと同じように、支援しようとする人たちが現地で頑張っている人たちを探していました。被災者であり、支援する側の経験もある僕ができることがあるはずだと思い、何人かの方とつながってきました。

これからどうなるかわからないけれど、何とか自分ごととして受け入れようとされる方々の姿は、5年前の自分を見る意思でした。東北でどんなことがあり、自分たちにはこれからどんなことが起きるのか聞きたい、という声もたくさん聞きました。かつて、神戸で被災し、支援に入ってくださった方から「僕らの過去が、君たちの未来だよ」と言われたことがあります。だから僕らには、自分たちの経験を伝える役割があると思っています。今度は、僕らが作ったロードマップを持つて伺い、「待っているだけ



ロボットの構成を考えて、組み立てて、動かして…。自分たちのアイデアを、自分たちのスキルで形にする経験は若者たちの大きな自信と財産になる

では復旧復興は、進まないですよ。一緒に考えてみませんか」と、考えるお手伝いをしようと思います。

復興を着実に進める上で一番大切なのは、見通しを持つことです。計画を立てても次のステップに進めない人は必ず現れます。でも、たとえば「自分が暮らしていたあの場所で、もう一度生活したい」という目標があれば、頑張れる。僕もそう。震災で大きなものを失った。でも、縁に恵まれて新しい家族ができ、子どもが生まれたことで「明日も生きる」と思っています。多くの大小の課題にぶつかり、そのたびに解決する方法を身に付けてきました。それは並大抵のことではなかった。でも、僕らはこの街にずっと住もうと思っていて、復興した先是、前よりもいい街にしようと思っている。挑戦に終わりはありません。

# 今よりも一步前へ。 新たな取組みへ挑む背中が 次世代の漁師を育てる

菅原靴店店主／AD BOAT PROJECT 発起人  
【岩手県盛岡市】

菅原 誠さん



震災直後、靴を1万足集めて届ける活動をしていた菅原さん。沿岸部で靴屋が再開しはじめた頃、漁業の復活を考え、企業やブランドから支援金を漁船購入資金の一部や事業運転資金にあて、支援を受けた船にはF-1カーのように企業ロゴを記す「AD BOAT PROJECT」を開始。支援する側にどのようにお金が使われたかを明確に提示できるプロジェクトに、多くの企業やブランドが賛同。2011年10月に第1号の復興支援船が完成し、現在までに180隻にもなる。そして今、漁師たちと支援者が「食」で繋がる新たなプロジェクトが始まるとしている。

日本全国、そして世界中からの支援をいただき、北は久慈、南は陸前高田まで各港に約180隻の支援船を浮かべることができました。まだあと63隻、支援待ちの漁師さんがいるので、今は一旦漁師さんの応募は締め切らせていただきましたが、引き続き支援者を募つてある状況です。復興の過程でやはり、まちおこしに繋がるビジネスが絶対必要になつてくると思っていました。もともとファッション業界にいたこともあり、ファッショント漁師さんとコラボレーションできないかという思いではじまっているのですが、震災から5年目を迎える漁師さんたちにもそういう思いが出てきたなというのが、被災地で頑張っている漁師さんたちの印象です。世界中から支援をしてもらい、色々な方に会つていくなかで「俺がやってやるぞ」という漁師さんたちが、どんどん増えていった。最初は「昔に戻りたい」と言つていた人も、もう一步先、「もっとこういうこともやつてみたい」と思うことが増えたんだと思います。とくに、若い漁師さんたちはチームを組んで様々なことにチャレンジしていく。そこに私たちもできるだけサポートや情報を促していくことが必要だなと感じています。ただ、その一方で昔の状態に戻ったまま、あるいは昔よりも状況が

悪くなつてしまつている漁師さんたちもたくさんいらっしゃいます。今後はそういう人たちも一緒に盛り上げられるように、活動を続けられたらなと思います。

震災で1万6000～7000隻の船が失われ、今は約1万2000隻が復活している状態です。しかし、せっかく船を持って漁に出ても、なかなか魚が高く売れない。いくら捕つても全然給料にならない状況の漁師さんもすごく多いんですね。新鮮な魚を50円でも100円でも高く売る方法はないかとずっと相談されていました。「AD BOAT PROJECT」活動を通して、180人の漁師さんと繋がることができます。ならば、「AD BOAT PROJECT」で全国の飲食店や家庭に直送できる仕組みをつくるのではないかと考えました。船の支援をしておしまいではなく、そこからさらに彼らのビジネスを支援するということが、プロジェクトの進むべき方向です。漁師さんたちには、自分たちが揚げたタコやアワビ、ウニを携帯カメラで撮影して動画配信してもらい、それを見たお客様に新鮮なものを買つてもらおう。今、漁師さんと打ち合わせしているのは、「復興支援ではなく、本当においしいものをきちんととした状態で届けないといけない。情で買つても買っても仕方ない。本当にいいものを届ける仕組みをつくりましょう」ということです。今年中に、漁師さんが直送する「AD BOAT FISHERMAN'S DIRECT」をウェブサイトで立ち上げる予定です。

菅原 誠 すがわら・まさと

1974年岩手県盛岡市生まれ。盛岡市内でイタリア靴を主体とした店舗を経営。震災後、沿岸部の主幹産業であった漁業復興のため「AD BOAT PROJECT」を立ち上げる。仕事柄海外とのコネクションも多かったことから、国内外で広く支援を募り、「AD BOAT PROJECT」をPR。沿岸部に浮かぶ復興支援船には、国内外問わず数々のファッショングランドロゴが記されている。

# ここで生きることの愛着や誇り、 人が持つエネルギーを アートの力で地域に還元する

ビルド・フルーガス代表／塩竈市杉村惇美術館 統括  
【宮城県塩竈市】

高田 彩さん



宮城県塩竈市にある「ビルド・フルーガス」は、国内外のアーティストと関係性を築き、展覧会やワークショップを通して「人とアートが出会う場」を生み出してきた。代表をつとめる高田さんは震災後、関わりのあった幼稚園や文化施設で物資支援や子どもたちを対象にしたワークショップを行った。仮設住宅への入居がはじまってからは、ボランティア団体と連携して「ミニミニティづくり」のための活動や、アーティストと地元のマッチングを図りながらコーディネートを行っていた。現在も、人の力や発想力、機動力を集め、アートを通して地域に還元する活動を続けている。

塩竈で「ビルドスペース」をオープンして今年で10年目になります。引き続き変わらず、ワークショップや作品発表を行っているのですが、2014年11月から塩竈市杉村惇美術館ができ、現在運営にも携わっています。美術館は昭和25年から公民館として市民活動をサポートしてきた場所をリノベーションして誕生しました。そこでこの町の歩みから建物にもう一度集積していくような活動を行っています。加えて、震災後から松島湾・東松島・利府・塩竈・多賀城・七里ヶ浜という松島湾に面した地域を舞台に、もう一度自分たちの土地の文化を再発掘する「つながる湾プロジェクト」を継続しています。正直なところ、2011年から2013年の記憶が飛んでいて、本当に無意識にそのときできることを瞬時の判断で動いていたんだと思います。震災後はとくにニーズを聞き入れる、地域の声を聞くことに集中していました。その声に対し、アーティストの考え方やアイデアが合ふかどうかのマッチングも非常に重要だったと思います。2013年頃に、自分のなかにあつた「被災感」のようなものが拭われた瞬間があり、それは東京の三宅島に行つた経験も大きかったかもしれません。20年に一度噴火して被災地

になるというところに、2000人の人々が住んでいて「こういう島国に生きているんだ」というの人たちにも変化は起きていて、復興の過程で外から多くの援助をいただいて、その援助が終わったことによって動きが止まってしまったり、活動そのものがなくなってしまうことも少なくなかつた。そのなかでお店の方や若者、イベントを運営する方が、復興をアピールするのではなく、「この土地で当たり前にやるべきこと、自分たちのまつりごとを続けていこう」という意識になつてきているように思います。

「ビルドスペース」5年目で震災が起きましたが、それまでの5年間で塩竈においてビルドの役割が明確だったでの、支援の行き来や人のケアができるんです。小さいことですが、そういうことで個の役割が最大限生かされる機会は多いと思います。なので、「コトを築く」プロジェクトは当たり前にやっていくこと、習慣的にやっていくことが、緊急時には非常に役に立つのではないかと感じています。

震災からこの5年間に、アートプロジェクトを通して多様な考え方を許す寛容さというか、包容力のようなものがとても重要な視点だったようになります。それは正しい、正しくないではなく、考える余白を与えることができるアートであるということ。これからもそれは重要なことですし、「ビルドスペース」でも美術館でも、つながる湾プロジェクトでも提供し続けなければいけないと感じています。

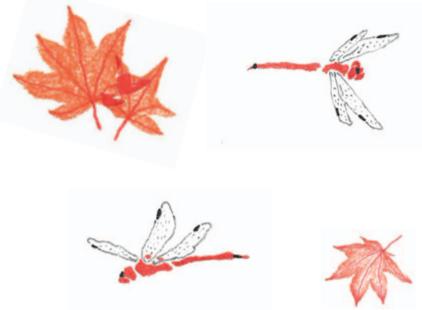
高田 彩 たかだ・あや

1980年宮城県塩竈市生まれ。2006年、塩竈市内に「ビルドスペース」をオープン。アートと地域の距離を縮めるため、北米や地元のアーティストや建築家らと出張ワークショップやイベントを開催。2013年には松島町で被災し、惜しまれながらも解体が決定した「カフェロワン」で行われた「ジョルジュ・ルース アートプロジェクト in 宮城」にも携わり、「ビルドスペース」では作品展示と記録映像の上映を行った。



ご愛読ありがとうございました

## わわプロジェクトは これからも伝え続けます



### 復興リーダーが語る映像展示

3.11直後から現在までの想いを、復興リーダーたちが語ります。  
42インチの大型モニタによる展示で、  
等身大に映しだされた彼らと向き合うことができます。  
2011年からわわプロジェクトが  
継続して取り組んでいる展示企画です。

WEB公開中



バックナンバーが  
すべて  
見れます

wawa新聞  
バックナンバー

2011年9月から発行を続けた  
「わわ新聞」のバックナンバー記事(PDF形式)  
をウェブサイトからご覧いただけます。

インタビュー

2011年から2015年までの  
復興リーダーへのインタビューを  
文字と映像で紹介しています。  
(来春までに2016年最新版公開予定)



### 読者プレゼント

プレゼントご希望の方は、応募用紙にご記入いただき、はがき、  
またはメール、FAXにてお送りください。

\*締切：11月30日[必着]

プレゼントの当選は発送をもってかえさせていただきます。

【ハガキで】応募用紙をハガキに貼り、以下の住所までお送りください。

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-1  
わわプロジェクト「わわ新聞13号 プレゼント」係

【FAXで】

応募用紙を03-3518-9102までお送りください。

【メールで】

応募用紙内の項目をメール本文にご記入いただき info@wawa.or.jp  
までお送りください。

#### プレゼント応募用紙【ご記入欄】

16

●住所：〒

●氏名：

年齢

●電話番号：

●希望するプレゼント(いずれかに○をつけてください)

- ① 書籍「つくることが生きること」
- ② わわ新聞バックナンバーセット
- ③ アーツ千代田3331／オリジナルパーカー

●『わわ新聞』入手した場所

●『わわ新聞』をお読みになった感想

これまで「わわ新聞」をご愛読いただきありがとうございました。

#### ①書籍「つくることが生きること」 <30名様>

2012年までの復興リーダーへのインタビューをはじめ、復興支援に関わった70組のアーティストや活動者たちの多様なプロジェクトを収録した資料性の高い1冊です。



#### ②わわ新聞バックナンバーセット <20名様>

2011年から発行した「わわ新聞」過去号をまとめてお送りします。今読んでも身になる記事ばかりです。\*在庫切れの号がございます。予めご了承ください。



#### ③アーツ千代田 3331／ オリジナルパーカー <5名様>

わわプロジェクトの拠点“3331”的オリジナル。胸には江戸一本締めの音のリズムを表した「三三三一」がデザインされています。(サイズ:M)



### 編集後記

東日本大震災と原発事故の被害を受け、岩手・宮城・福島の仮設住宅に住む方々や避難をされている方々をメインに発行を続けてきた“心と心をつなぐコミュニティ新聞”「わわ新聞」は、今回で最終号を迎えます。2011年9月の創刊以来、人々の「復興へ向かう創造力」に着目し、被災地や復興という言葉に閉ざされがちな情報・活動をつなげ発信して参りました。これまでご愛読・ご賛同いただいた皆様へ、心から御礼申し上げます。2016年、仮設住宅からの移転が進む状況を踏まえ、わわ新聞は役割を終えますが、わわプロジェクトはこれからもアーツ千代田3331を拠点に活動を続けて参ります。これからもどうぞよろしくお願いします。

発行人:中村政人／編集:高村陽子／  
ライター:小西七重、小畠智恵／  
デザイナー:西山里佳／写真:hana ozawa  
印刷:北鹿新聞

発行元:わわプロジェクト  
(一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドN)  
〒101-0054  
東京都千代田区神田錦町2-1  
TEL:03-3518-9101  
FAX:03-3518-9102  
MAIL:info@wawa.or.jp

<http://wawa.or.jp/>

特別協賛

すべての革新は患者さんのために  
 CHUGAI 中外製薬

Roche ロシュ グループ

助成

新進オランティア・NPO活動  
